

岸上慎二校

後撰和歌集

爲相自筆
天福本

下

古典文庫

岸上慎二校

後撰和歌集

爲相自筆
天福本

下

古典文庫

古典文庫 第一三一冊

昭和三十三年六月二十日 印刷發行

非賣品

校者 岸 上 慎 二

東京都北區西ヶ原三ノ三四

發行者 吉 田 幸 一

東京都千代田區神田三崎町二ノ六

印刷者 英和印刷株式會社

集歌和撰後
下

發行所

東京都(豐島局區內)
北區西ヶ原三ノ三四

古 典 文 庫

振替口座東京一四五九七番

後撰和歌集 卷第十四

戀^哥
六

人のもとにつかはしける

よみ人しらず

九五四 逢事をよどに有てふみづのもりつらしと君を見つるころ哉

返し

九九五 みづのもりもるこのごろのながめには怨もあへずよどの河浪

みづからまできて、よもすがら物いひ侍けるに、ほどなくあけ侍にければ

まかりかへりて

九九六 うき世とは思物からあまのとのあくるはつらき物にぞ有ける

女のもとにつかはしける

九九七 うらむれどこふれど君がよとゝもにしらずかほにてつれな^{△△△}かるらん

返し

九九八 怨むともこふともいかゞ雲井よりはるけき人をそらにしるべき

いひわづらひてやみにける人に、ひさしうありて又つかはしける

九九九 しづはたにへつるほど也白糸のたえぬる身とはおもはざらなん

返し

1000 へつるよりうすくなりにしゝづはたのいとはたえてもかひやなからん

をとこのまできてすぎ事をのみしければ、人やいかゞ見るらんとて

1001 くる事は常ならずともたまかづらたのみはたえじと思心あり

返し

1002 玉鬘たのめくる日のかずはあれどたえぐにてはかひなかりけり

をとこのひさしうをとづれざりければ

1003 いにしへの心はなくや成にけんたのめしことのたえてとしふる

返し

1004 いにしへも今も心のなければどうきをもしらで年をのみふる

おとこのたゞなりける時^{*}にはつねにまうできけるが、ものいひてのちはか
どよりわたれどまでこざりければ

1005 たえたりし昔だに見しうちはしを今はわたるとをとにのみきく

いひわびてふたとせ許、をともせずなりにけるおとこの五月ばかりにまう
できて、年ごろひさしうありつるなどいひてまかりにけるに

1006 わすられて年ふるさとの郭公なにゝひとこゑなきてゆく覽

題しらず

1007 とふやとてすぎなきやどにきにけれどこひしきことぞしるべなりける

物のたうひ
物いひわびて女のもとにいひやりける

1008 露のいのちいつともしらぬ世中になどうかつらしと思をかるゝ

女のほかに侍けるを、そこにとをしふる人も侍らざりければ、心づからと

ぶらひて侍ける返事につかはしける

二〇九 かり人のたづぬるしかはいなびのにあはでのみこそあらまほしけれ

しのびたる女のもとよりなどかをとせぬと申たりければ

右大臣

二一〇 を山田の水ならなくにかく許流そめてはたえん物かは

おとこのまでこで、あり／＼て雨のふる夜、おほかさをこひにつかはした
りければ
これひらの朝臣のむすめいまき

二一一 月にだにまつほどおほくすぎぬれば雨もよにこじとおもほゆる哉

はじめて人につかはしける

よみ人しらず

二一二 思つゝまだいひそめぬわがこひをおなじ心にしらせてし哉

いひわづらひてやみにけるを、又思いでゝとぶらひ侍ければ、いと定なき
心哉といひてあすか河の心をいひつかはして侍ければ

一〇三 あすか河心の内にながるればそのしがらみいつかよどまん

思かけたる女のもとに

あさよりの朝臣

一〇四 ふじのねをよそにぞきゝし今はわが思ひにもゆる煙なりけり

返し

よみ人しらず

一〇五 しるしなき思とぞきくふじのねもかごと許の煙なるらん

いひかはしけるおとこの、おやいといたうせいすときゝて、女のいひつか
はしける

一〇六 いひさしてとどめらるなる池水の波いづかたに思よるらん

おなじ所に侍ける人の、思心侍けれどいはでしのびけるを、いかなるおり

にかありけん、あたりにかきておとしける

二〇七 しられじなわがひとしれぬ心もて君を思ひのなかにもゆとは

心ざしをばあはれとおもへど人めになんつゝむといひて侍ければ

二〇八 あふばかりなくてのみふるわがこひを人めにかくる事のわびしさ

題しらず

二〇九 夏衣身にはなるともわがためにうすき心はかけ^{△△}ずもあら南

二一〇 いかにして事かたらはん郭公歎のしたになければかひなし

二一一 思ひつゝへにける年をしるべにてなれぬる物は心なりけり拾遺

ふみなどつかはしける女の、ことおとこにつき侍けるにつかはしける

源とゝのふ 整

一〇三 我ならぬ人住の江の岸にいでゝなにはの方を怨つる哉

とゝのふ、かれがたになり侍にければとゞめをきたるふえをつかはすとて

よみ人しらず

一〇三 にごりゆく水には影の見えばこそあしまよふえをとゞめても見め

菅原のおほいまうちぎみの家に侍ける女に、かよひ侍けるおとこなかたえて又とひて侍ければ

一〇四 菅原や伏見の里のあれしよりかよひし人の跡もたえにき

女のおとこをいとひてさすがにいかゞおぼえけんいへりける

一〇五 ちはやぶる神にもあらぬわがなかの雲井遙に成もゆく哉

返し

一〇六 千早振神にも何にたとふらんをのれくもゐに人をなしつゝ

〔女三〕^(朱)のみに

あつよしのみに 女一のみに

一〇三七 うきしづみふちせにさはぐにほとりはそこものどかにあらじと思

かひに人のものいふときゝて

藤原守文

一〇三八 松山に浪たかきをとどきこゆる我よりこゆる人はあらじを

おとこのもとに雨ふる夜、かさをやりてよびけれどこざりければ

よみ人しらず

一〇三九 さしてこと思し物をみかさ山かひなく雨のもりにける哉

返し

一〇四〇 もるめのみあまたみゆればみかさ山しるゝいかゞさしてゆくべき

女のもとより、いといたくな思わびそとたのめをこせて侍ければ

1031 なぐさむることのはにだにかゝらずは^{△△}今もけぬべき露の命を

元良のみこのみそかにすみ侍ける、今こむとたのめてこずなりにければ

兵衛 兼茂朝臣女

1032 ひとしれずまつにねられぬ晨明の月にさへこそあざむかれけれ

しのびてすみ侍ける人のもとより、かゝるけしき人に見すなといへりければ
もとかた

1033 龍田河たちなば君が名をゝしみいはせのもりのいはじとぞ思

宇多院に侍ける人にせうそつかはしける返事も侍らざりければ

よみ人しらず

1034 うだのゝはみゝなし山かよぶこ鳥よぶこゑにだにこたへざるらん

返し

女五のみこ 依子

鬘宮
母更衣貞子
大納言昇女

一〇三五 耳なしの山ならずともよぶこどり何かはきかん時ならぬねを

つれなく侍ける人に

たゞみね

一〇三六 こひわびてしぬてふことはまだなきを世のためしにもなりぬべきかな

たちよりけるに、女にげていりければつかはしける

よみ人しらず

一〇三七 影見ればおくへいりける君によりなどか涙のとへばいづらむ

あひにける女のまたあはざりければ

一〇三八 しらざりし時だにこえし相坂をなど今更にわれ迷覽

女のもとにまかりそめてあしたに

藤原かげもと 蔭基

二〇三九 あかずして枕のうへに別にしゆめぢを又もたづねてし哉

をとこのとはずなりにければ

よみ人しらず

二〇四〇 をともせずなりもゆく哉すぐか山こゆてふなのみたかくたちつゝ

返し

二〇四一 こえぬてふ名をなうらみそすぐか山いとゞまぢかくならんと思を

女に物いはんとてきたりけれど、こと人に物いひければかへりて

二〇四二 わがためにかつはつらしと見山木のこりともこりぬかゝるこひせじ

返し

二〇四三 あふごなき身とはしるゝ戀すとして歎こりつむ人はよきかは

人につかはしける

戒仙法師

一〇四四

あさごとに露はをけども人こふるわが事のはゝ色もかはらず

きてものいひけるひとの、おほかたはむつまじかりけれど、ちかうはえあ
らずして

よみ人しらず

一〇四五

まぢかくてつらきを見るはうけれどもうきは物かはこひしきよりは

女のもとにつかはしける

藤原さねたゞ

一〇四六

つくしなる思ひそめ河わたりなば水やまさらんよどむ時なく

返し

よみ人しらず

一〇四七

渡てはあだになるてふ染河の心づくしになりもこそすれ

おとこのもとより、花ざかりにこむといひてこざりければ

一〇四八 花ざかりすぐしゝ人はつらけれど事のはをさへかくしやはせん

おとこのひさしうとはざりければ

右 近

一〇四九 とふことをまつに月日はこゆる木のいそにやいでゝ今はうらみん

あひしりて侍ける人のもとに、ひさしうまからざりければ、忘草なにをか
たねと思しはと、いふことをいひつかはしたりければ

よみ人しらず

一〇五〇 忘草名をもゆゝしみかりにてもおふてふやどはゆきてだに見じ

返し

一〇五一 うきことのしげきやどには忘草うへてだにみじ秋ぞわびしき

女ともろともに侍て

一〇五二 かずしらぬ思ひは君にある物をゝき所なき心地こそすれ